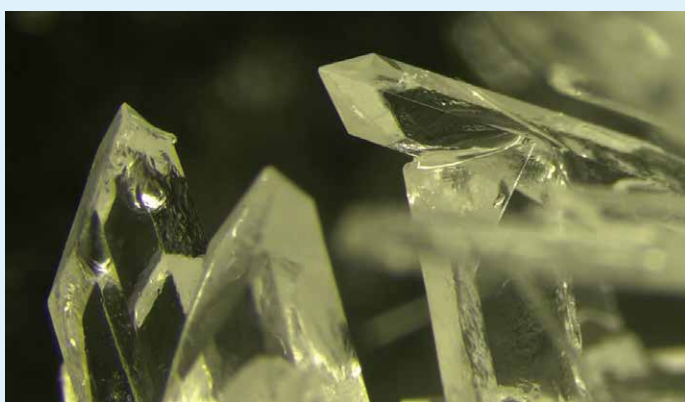


香川大学 環境報告書

KAGAWA UNIVERSITY ENVIRONMENTAL REPORT

2026



CONTENTS

※目次の○は
該当するSDGsナンバー

学長挨拶 1

大学概要 2
大学概要／沿革／キャンパスマップ

環境マネジメントの概要 3
環境配慮の方針／環境コミュニケーション
環境目標・実施計画及び実績／エネルギー管理体制図

SDGsアクションプラン 7
香川大学SDGsアクションプランについて

環境研究活動の紹介 8
・藻場から始まる
資源あふれる豊かな瀬戸内海の創生 6 7 9 12 13 14
・希少糖イノベーションの共創的価値向上と
エコシステム型の知の拠点形成プロジェクト 2 6 9 14 15
・未利用資源を活用したカーボンネガティブ建材の開発
～瀬戸内の海を再生する資源循環へ～ 12 13 14
・古代・中世の稲作を復元しつつ在来種の性格をさぐる! 2 12 15

環境教育による人材育成 12
大学の環境教育
・フィールド実習を通じた学び
～香大実りパークなどの取組～ 4 12
教育学部附属学校園の環境教育
・「MIRAI協働の学び」
～学校周辺の身近なところから考える。～ 7 11 14
・ウェルビーイング弁当! 1 2 12 13

地域への環境貢献 16
・大地の成り立ちから香川の魅力を発見・発信する
せとうち讃岐ジオパーク構想推進モデルの構築in小豆島 13 14 15
・「図書室の中の学校プロジェクト」が育む、新しい読書の空間 4
・「海ゴミ問題をAIプログラムで解決!」
瀬戸内海の家ゴミ問題を解決するための
教育実践プログラムの開発 4 14
・善通寺市との連携による
「都市と地域を結ぶ、想いの架け橋事業」の実施 4 8 11 12 17

学生主体の活動 19
・学生の手でつなぐ、笠島の町並みと暮らし 4 11 12 17
・「20年の歩みを力に、持続可能な直島の未来へ」 11 12 13 17
・サイバー空間の安全・安心なまちづくり 4 9 11
・「多言語マップと観光ガイドで伝える男木島の魅力」 10 11

国際貢献活動 21
・香川大学医学部老年看護学講座とJICAによる
ミクロネシア短期大学への老年看護教育支援の概要 1 3 4 10

環境負荷の低減活動 22
エネルギー使用量削減目標と実績／マテリアルバランス
新エネルギー導入による環境負荷低減
循環水利用の取り組み
省エネルギー対策のための施設整備
排水の水質に係る管理状況／化学物質等の適正管理
大気汚染物質に係る管理状況／フロン類の適正管理
グリーン購入・グリーン契約／環境に関する法規制の遵守

環境報告ガイドライン対照表 32

編集後記 33

環境報告書の対象範囲等

- 環境報告書対象キャンパス：全キャンパス
(職員宿舎、借用地を除く)
- 対象期間：2025年(令和7年)4月～2026年(令和8年)3月
- 参考にしたガイドライン：「環境報告ガイドライン(2018年版)」
(平成30年6月 環境省)
- 公表方法：香川大学ホームページにて公表
- 発行年月：2026年(令和8年)9月

環境報告書とは、事業者が自らの事業活動に伴う環境負荷の状況や環境配慮の取組などの環境情報を総合的に取りまとめて公表する年次報告書である。

表紙について

表紙では、①希少糖であるD-アルロースの結晶、②笠島プロジェクトで改修した古民家を一般公開した様子、③せとうち讃岐ジオパーク構想の実現を目指した採石場跡調査、④瀬戸内海に防災機能と藻場造成機能を有する構造物を沈設する様子、⑤直島地域活性化プロジェクト主催の「全国まちづくりカレッジ」、⑥「図書館の中の学校プロジェクト」で改修したスペースを紹介しています。裏表紙には海ゴミ調査も兼ねて実施した牛島の海岸清掃の様子を掲載しております。

表紙、裏表紙で紹介した活動は本誌にてご覧いただけます。また、その他地球環境保護に向けた多様な取り組みも併せて掲載しておりますので、ぜひご一読ください。



裏表紙

表紙

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



香川大学は、持続可能な開発目標(SDGs)達成に向けて積極的に取り組んでいます。



香川大学環境報告書

検索



この環境報告書は、香川大学ホームページでも公表しています。

<https://www.kagawa-u.ac.jp/information/approach/environment/>

学長挨拶

香川大学「環境報告書2026」の刊行にあたり、ステークホルダーの皆様の温かいご支援とご協力に心より感謝申し上げます。

今日、地球規模での気候変動や環境問題は、私たち人類が直面する最も深刻な課題の一つであり、地域の知の拠点である大学が果たすべき社会的責任はますます大きくなっています。本学は「持続可能な地方分散型社会の実現に貢献する人材の育成と研究の推進」をビジョンに掲げ、「地域の経済・社会の発展を支える人材の育成」を基本としつつ、地域社会の近未来の諸課題の解決に向け、地域のステークホルダー等と意見交換を進めながら、多様な教育研究活動を展開しています。現在は第4期中期目標期間(2022～2027年度)の後半に差し掛かり、これまでの調査や研究の蓄積を社会実装等の成果へと結びつけるとともに、2040年を念頭に置いた18歳人口の急激な減少を見据えた次期(第5期)中期目標の構想も開始しています。



香川大学長

上田 夏生
う え だ な つ お

今年度の報告書において、環境研究の分野では、『藻場からはじまる資源あふれる豊かな瀬戸内海の創生』『希少糖イノベーションの共創的価値向上とエコシステム型の知の拠点形成プロジェクト』を始めとした様々な取組が紹介されています。地域貢献の分野では、『大地の成り立ちから香川の魅力を発見・発信するせとうち讃岐ジオパーク構想推進モデルの構築in小豆島』『図書室の中の学校プロジェクト』『海ゴミ問題をAIプログラムで解決!』など、地域社会における課題解決を推進しています。学生主体の活動では、「香大生の夢チャレンジプロジェクト」の1つである『笠島プロジェクト』、結成20周年を迎えた『直島地域活性化プロジェクト』など、学生が主体的にチャレンジする姿を発信しています。

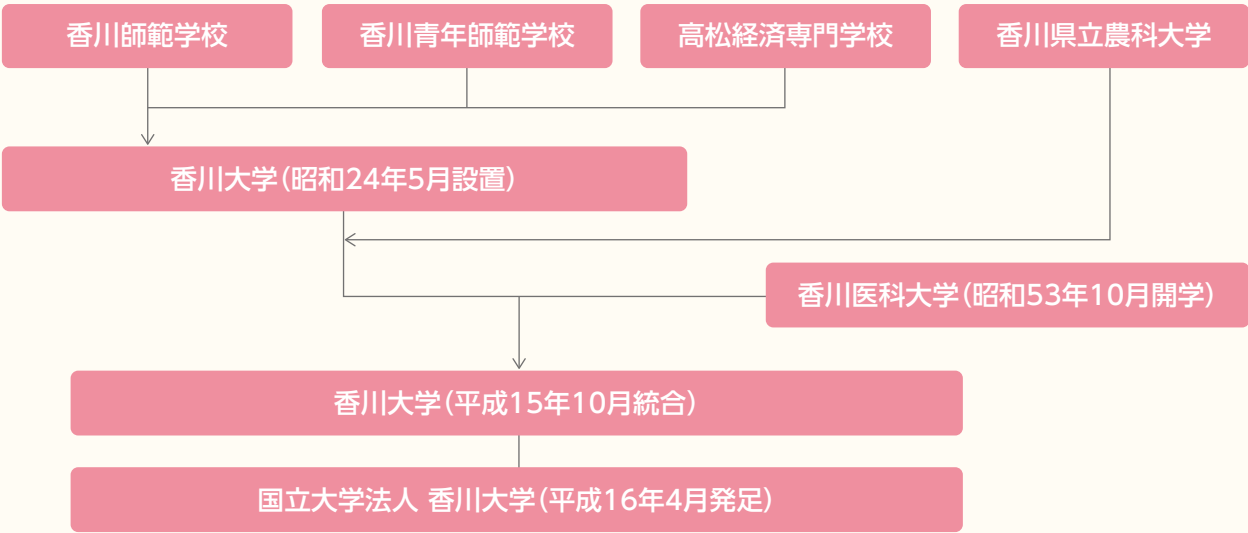
環境への配慮とイノベーションの創出は、未来へ続く不断の歩みです。香川大学はこれからも、学生、教職員が一丸となり、地域社会の皆様と手を取り合いながら、持続可能で彩り豊かな未来の創造に向けて挑戦を続けてまいります。今後とも、皆様の変わらぬご理解とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

大学概要

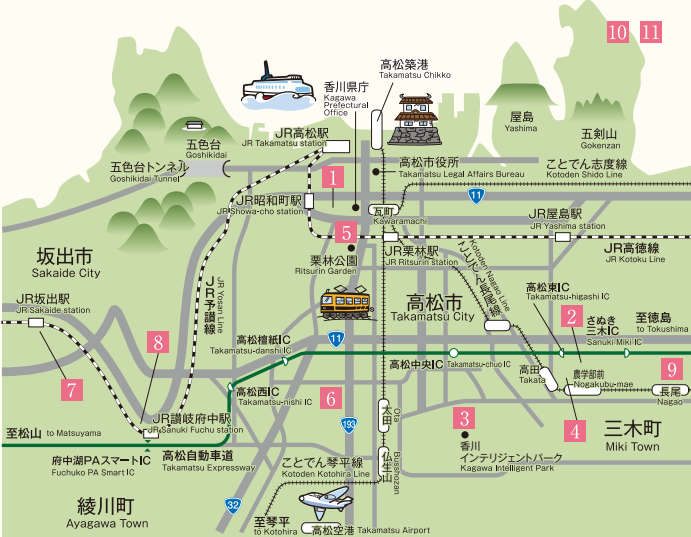
- 学校名
国立大学法人 香川大学
- 土地・建物面積 ※2026年(令和8年)5月1日現在
土地：949,836m²
建物：325,794m²

教職員・学生数 ※2026年(令和8年)5月1日現在	
区 分	人 数
役 員	8
教 職 員	2,094
学 部 生	5,645
大 学 院 生	905
附 属 学 校 園	1,807
合 計	10,459

沿革



キャンパスマップ



※2026年(令和8年)4月1日現在

環境マネジメントの概要



環境配慮の方針

基 本 理 念

香川大学は大学憲章に基づき、豊かな自然環境を有する瀬戸内圏における知の拠点として、世界水準の教育・研究活動を通じ、環境配慮に関する活動を広く発信します。また、環境活動の面でも中核となり、地域及び地球全体の環境保全に取り組み、持続的な社会の発展に貢献します。

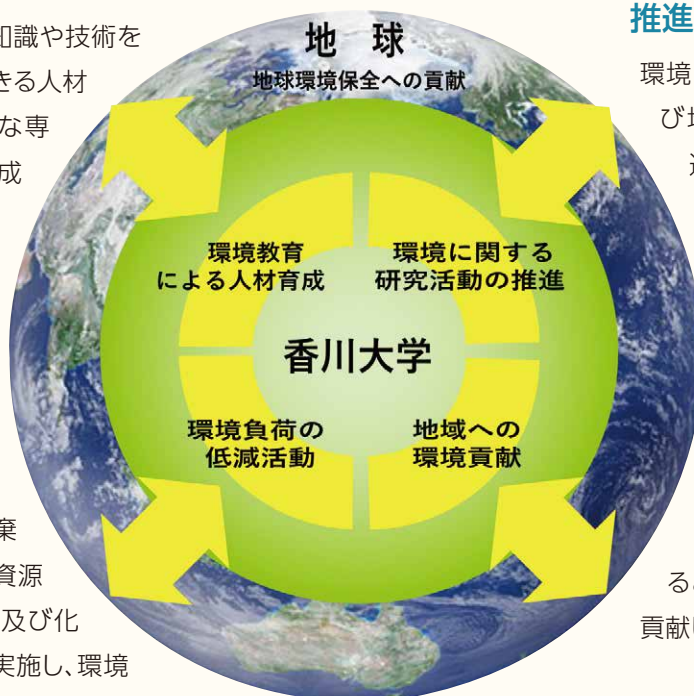
基 本 方 針

1 環境教育を重視する大学をめざす

環境に関する基礎的な知識や技術を有し、取り組みを率先できる人材及び環境に関する高度な専門性を有する人材を育成します。

4 人にも環境にもやさしい大学をめざす

教育・研究活動において、省エネ、省資源、廃棄物の適正管理・削減・再資源化、グリーン購入の推進及び化学物質の適正管理等を実施し、環境負荷の低減に努めるとともに環境マネジメントシステムを確立し、エコキャンパスをめざします。



2 環境に関する研究活動を推進する大学をめざす

環境に関する先進的な研究及び地域に密着した研究を推進し、環境に関する科学の発展と環境問題の解決に貢献します。

3 地域と共に歩む大学をめざす

環境に関する研究成果や情報を地域に発信し、地域社会との連携をはかるとともに地域の活性化に貢献します。



環境コミュニケーション

香川大学では、香川大学のホームページ、広報室、図書館などを通して、環境情報の開示を積極的に行っています。

●環境報告書の発行

2006年度(平成18年度)から、環境報告書を冊子・Webで公表しています。

学内関係者とのコミュニケーションツールとして、香川大学の環境に関する研究・教育活動・環境配慮活動の取り組み状況、地域とのコミュニケーション状況などの情報を公開しています。

《公開URL》

<https://www.kagawa-u.ac.jp/information/approach/environment/>



環境目標・実施計画及び実績

香川大学の環境目標と実施計画及び2025年度(令和7年度)の実績は下表のとおりです。

環境方針	環境目標	実施計画
1. 環境教育による人材育成	環境教育を充実させ、環境意識を向上させる	①大学での環境教育カリキュラムを充実させ、環境に関する基礎力及び応用力を育成する
		②生徒・児童に、環境に関する基礎的な教養を育む
2. 環境に関する研究活動の推進	環境関連研究を推進する	①環境保全に貢献する研究を推進する
		②外部との研究協力体制を推進する
3. 地域への環境貢献	地域への情報発信を積極的に行う	①環境報告書の発行により、地域に情報を発信する
	地域社会との連携をはかり、地域の活性化を推進する	②地域のニーズにあわせたイベントを実施する
		③地域の清掃活動を実施する
4. 環境負荷の低減活動	「香川大学省エネルギー対策に関する規程」及び「エネルギー管理に関する基本計画」では、2024年度から2028年度(5年間)までの期間中に、エネルギー使用量及び温室効果ガス排出量を2022年度を基準とし、原単位(建物延べ床面積当たりのエネルギー使用量及び温室効果ガス排出量)で5%削減することを努力目標とする	①省エネ施策の実施と啓発活動を行い、エネルギー使用量を削減する
	省資源を推進し、紙、水使用量を削減する	②省資源施策の実施と啓発活動を行う
	廃棄物を適正に管理する	③廃棄物の適正な処理・リサイクルを行う
	グリーン購入法を推進する	④グリーン購入を実施する
	化学物質を適正に管理する	⑤化学物質を適正に管理する

大学概要

環境マネジメントの概要

SDGソリューション

環境研究活動の紹介

環境教育による人材育成

地域への環境貢献

学生主体の活動

国際貢献活動

環境負荷の低減活動

環境報告ガイドライン対照表

編集後記



※判定欄の記号は下記の判断内容としました。

- ◎：目標を達成した。
○：一部は目標を達成できなかったが、十分な取り組みを行った。
△：取り組みは行ったものの、目標を達成できなかった。

2025年度(令和7年度)実績	関連ページ	判定※	次年度の取り組み・将来の見通し
①各学部、大学院で環境に関する講座、実習を充実させた	12-15	◎	引き続き、大学での環境教育カリキュラムを充実させ、環境に関する基礎力及び応用力を育成する
②理科や社会、総合学習、校外活動などの授業により、環境に関する学習を充実させた		◎	引き続き、生徒・児童に、環境に関する基礎的な教養を育む
①環境に関する研究を実施した	8-11	◎	引き続き、環境保全に貢献する研究を推進する
②産学官交流を推進し、共同研究などを実施した		◎	引き続き、外部との研究協力体制を推進する
①環境報告書2025を発行し、さらに香川大学ホームページに掲載した	3	◎	引き続き、環境報告書の発行により、積極的に地域に情報を発信する
②公開講座やシンポジウム、研修会、講師派遣などを実施した	17, 18	◎	引き続き、地域のニーズにあわせたイベントなどを実施する
③キャンパス内におけるクリーンキャンパスの活動をはじめ、地域の清掃活動を実施した	15, 18	◎	引き続き、地域の清掃活動を実施する
①基準年度(2022年度)比は以下のとおり ・エネルギー使用量原単位：2.6%減 ・温室効果ガス排出量原単位：12.3%減 〈主な省エネルギー対策〉 ・空調の適切な温度設定 ・省エネルギー効果の高い空調機、LED照明の導入 ・照明等のこまめな電源OFF ・階段の利用、ポスター掲示などによる活動の啓発 ・建物の改修や省エネルギー設備の導入	22-26, 28	◎	引き続き、省エネ施策の実施と啓発活動を行い、エネルギー使用量を削減する
②前年度比は以下のとおり ・紙：19.0%減 ・水：3.2%増 〈主な省資源対策〉 ・紙：電子データ化、両面印刷、裏紙利用の実施 ・水：節水シールの貼付、節水型設備への更新、止水栓の調整、循環水の利用など	26	○	引き続き、省資源施策の実施と啓発活動を行う
③廃棄物量は以下のとおり ・一般廃棄物排出量：833t ・産業廃棄物排出量：727t 前年度比0.7%減 〈主な低減対策〉 ・ゴミの分別、再資源化、リサイクルの実施 ・適正な業者による産業廃棄物処理	27	◎	引き続き、廃棄物の適正な処理・リサイクルを行う
④特定調達品目の達成状況 ・調達達成率100%(主な特定調達品目：紙類、文具類など)	31	◎	引き続き、グリーン購入を実施する
⑤化学物質の管理状況 ・法令遵守 ・施錠保管庫での管理、管理記録簿への記載	30	◎	引き続き、化学物質を適正に管理する

大学概要

環境マネジメントの概要

SDGアクションプラン

環境研究活動の紹介

環境教育による人材育成

地域への環境貢献

学生主体の活動

国際貢献活動

環境負荷の低減活動

環境報告ガイドライン対照表

編集後記



エネルギー管理体制図

※2026年(令和8年)4月1日現在



7

環境研究活動の紹介



藻場から始まる資源あふれる豊かな瀬戸内海の創生

副学長(研究・産官学連携・特命担当) 末永 慶寛

創造工学部 高橋 悟 教授、吉田 秀典 教授、岡崎 慎一郎 教授、

玉置 哲也 准教授、柏山 浩史 特命教授

香川大学瀬戸内圏研究センター、香川県、

香川県漁業協同組合連合会、国立研究開発法人海洋研究開発機構



資源あふれる
豊かで持続可能な
瀬戸内海創生拠点
ホームページ



社会実装の例(公共事業での採用)

海草藻類の繁茂する「藻場」は、稚魚の保護・育成場、餌場、産卵場、波浪の低減場等の重要な機能を担っています。また、海草藻類は、海水に溶け込んだCO₂を光合成で吸収・隔離し、食物連鎖や枯死後の海底への堆積などで炭素を貯留します。この一連の生態系を「ブルーカーボン生態系」と呼んでいます。このように「藻場」は、地球温暖化抑制に大きく資するものです。しかし、近年は、各種沿岸域の開発等の様々な要因により「藻場」が減少し、同時に魚介類等の生物資源も減少の一途を辿っています。周辺を海に囲まれた香川県でも例外ではありません。

本取り組みは、藻場造成構造物の開発・沈設により、瀬戸内海における藻場の再生・拡大を進め、水産資源の回復、ブルーカーボン創出、防災・減災機能の

向上を一体的に実現することを目的としています。本構造物は、防災機能と藻場造成機能を併せ持つほか、海藻にダメージを与えることなく、他の構造物に海藻を容易に移設可能な着脱パーツを有するという点が特許にもなっています。また、コンクリートに二酸化炭素吸収材を混入して製作されているので、環境負荷の低減にもつながっています。これまで香川大学、香川県、漁業関連団体等との強力な連携体制により、香川県内の複数箇所で15年以上の継続した藻場造成機能を実証し、国の公共事業である水産基盤整備事業等にも採用されています。

藻場を起点に、漁業生産力の向上、海洋環境の保全、カーボンニュートラル、防災、地域産業振興、人材育成を結び付け、資源あふれる豊かな瀬戸内海の創生とネイチャーポジティブ社会の実現を推進しています。

香川大学の技術で、かつての資源あふれる豊かな瀬戸内海、日本の海、世界の海を復活・創生させたいと願っています！



海藻が繁茂した着脱パーツ



防災機能と藻場造成機能を有する構造物の沈設



海藻の覆われた構造物の様子



海藻の林冠内の様子



万博で使用されたモニュメントを再利用した藻場造成構造物





希少糖イノベーションの共創的価値向上と エコシステム型の知の拠点形成プロジェクト

理事・副学長／国際希少糖研究教育機構・機構長 秋光 和也



関連ホームページ

EXPO2025大阪・関西万博において、大学をはじめ企業や自治体が協働する研究プロジェクトの成果を発信する文部科学省主催イベント「わたしとみらい、つながるサイエンス展」に、香川大学の希少糖研究が選出されました。

8月14日から19日までの期間、国際希少糖研究教育機構のメンバーがパネル展示およびステージでのトークライブを実施しました。会場となったEXPOメッセ「WASSE」には連日1万人を超える来場者が訪れ、香川大学ブースも期間を通して多くの来場者でにぎわいました。

ブースでは、希少糖の食品分野における国際的な広がりに加え、SDGsに関連する農業・医療・工業分野での活用の可能性について紹介し、多くの来場者に理解を深めていただくことができました。また、たくさん子どもたちに「イズモリングゲーム」を通じて、希少糖について楽しく学んでもらうことができました。



トークライブでの上田学長(右)と秋光機構長(左)



万博展示の香川大展示ブースは、多くの来訪者であふれました。



D-アルロース結晶

第9回国際希少糖学会が、2025年11月16日から19日まで、かがわ国際会議場において開催され、香川大学および同大学国際希少糖研究教育機構が共催しました。

会期中は3日間にわたり活発な学術討論が行われ、約20か国から200名を超える研究者らが参加しました。当機構メンバーの研究グループからも、SDGsに関連する研究成果が数多く発表され、希少糖を取り巻く世界の最新動向や新たな研究成果が共有されるとともに、今後の展開を見据えた活発な議論が交わされました。



第9回国際希少糖学会開催 (<https://isrs.kagawa-u.ac.jp/>)



第9回国際希少糖学会・パネルディスカッションの様子

大学概要

環境マネジメントの概要

SDGサステイナブルプラン

環境研究活動の紹介

環境教育による人材育成

地域への環境貢献

学生主体の活動

国際貢献活動

環境負荷の低減活動

環境報告ガイドライン対照表

編集後記



未利用資源を活用した カーボンネガティブ建材の開発 ～瀬戸内の海を再生する資源循環へ～

創造工学部・イノベーションデザイン研究所 高橋 恵輔 教授



高橋恵輔教授ラボ
ホームページ

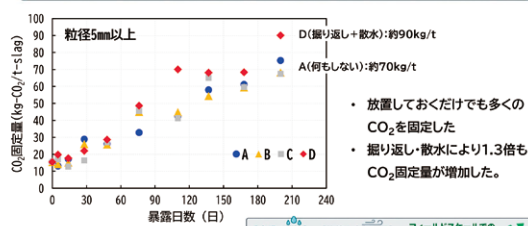
高橋研究室では、鉄をつくる工程で生じる副産物「製鋼スラグ」を、大気中の二酸化炭素(CO₂)を取り込む建材へと転換する研究に取り組んでいます。製鋼スラグは全国で年間およそ1200万トン発生しますが、その多くは有効に活用されないまま処分されてきました。カルシウムを豊富に含むこの素材は、屋外に置かれるだけで空気中のCO₂と反応し、石灰石の主成分である炭酸カルシウムへと変化します。特別な装置も追加のエネルギーもほとんど要しない、自然の力を活かしたCO₂の回収です。

製鋼スラグは通常、利用の前に屋外で数か月間保管されます。私たちの実証では、この保管期間のうち1、2ヶ月ほどで実用上十分な量のCO₂が固定されることを確認しました。加えて、ときおり水をまき、掘り返して空気に触れる面を増やすことで、固定量は放置した場合の約1.3倍にまで高まります。こうして炭酸化させたスラグを骨材(コンクリートの主原料となる砂利)に用いると、製造時に排出する量を上回るCO₂を吸収した「カーボンネガティブ」なコンクリートを、通常のコンクリートと同等の強度で製造できます。

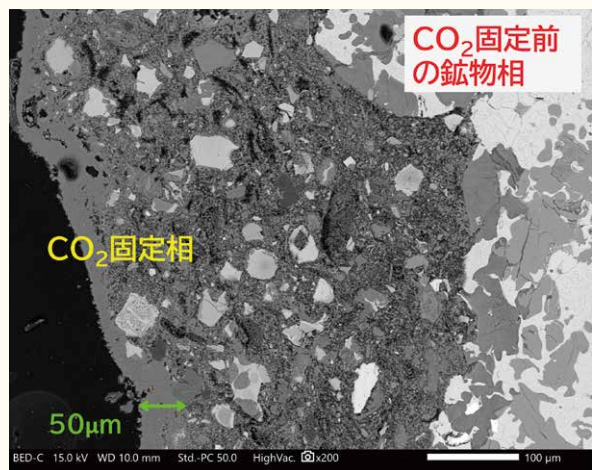
実用化には、CO₂固定量を製造現場で確かめる手段が欠かせません。高価な分析装置に代えて、小型の電気炉により半日ほどで測定できる簡易評価法を確立し、品質管理への道筋を示しました。

今後は、この建材を瀬戸内海に沈め、魚や海藻が集う藻場や漁礁の造成へと展開していく計画です。行き場を失っていた素材が、CO₂を減らしながら香川の海を再生する。地域の企業や漁業者の皆さまとともに、こうした資源循環の仕組みを香川から築いてまいります。

実証結果：200日間の自然暴露による大気CO₂の大量固定



固定量データ結果



SEM(走査型電子顕微鏡)結果

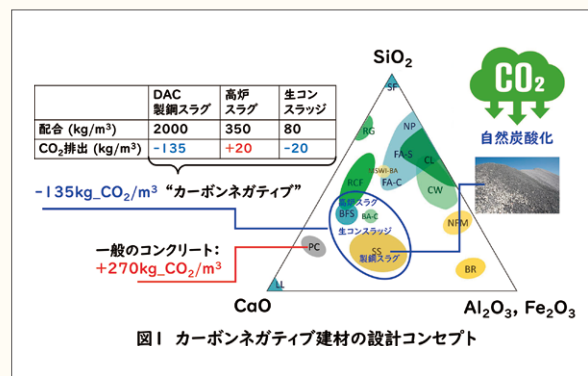


図1 カーボンネガティブ建材の設計コンセプト

研究概念図



古代・中世の稲作を復元しつつ 在来種の性格をさぐる！

教育学部 守田 逸人 教授

農学部 諸隈 正裕 教授・農場長



香川大学
ホームページ

本学農学部附属農場では、2023年度から教育学部守田研究室と農学部諸隈正裕研究室とで連携し、歴史的な稲作のあり方について実験的に明らかにする活動を継続的に行っています。前近代に広がっていた品種の性質を確認するとともに、前近代の人々が一定程度の収穫を得るための労働量などを検証する試みとして出発しました。

実験は農業生物資源ジーンバンクより、古代・中世史料に現れるコメ品種名

「あぜこし」や「しろいね」などの種子の提供を受け、中世の技術水準に則って行います。農薬を用いず施肥も中世段階の水準で行い、もちろん動力も用いず全て手作業で行います。そして、実験ではそうしたいわゆる前近代の日本列島で広く栽培されていた在来種と呼ばれるイネの性質を知るため、細かな生育調査や収量調査・食味調査も行っています。

ふだん私たちが目にする田園風景では、コシヒカリ等1mにも満たない穂丈のイネを目にします。ところが在来種の多くはそれらとは大きく異なります。穂丈が1.5mほどにも成長する「しろいね」をはじめ、基本的には穂丈が高いです。収穫前の時期ほどに



ゼミ生たちとの収穫作業

そうした迫力のある黄金色の稲穂が風になびく光景はとても美しいです。

実験で収穫したコメは、考古学・歴史学・食品科学・作物栽培学など様々な分野の研究者の連携のもとで土器を用いた炊飯実験等も行い、食味調査を行っております。

私たちの取り組みは、過去の稲作のあり方について検証するだけではありません。現在おおよそ栽培されなくなった在来種の性質を細かく調べることで在来種の現代的なメリットを探ったり、農薬・化学肥料を用いずに効率的に稲作を継続させる方法など、関心を広げながら実験を行っています。



しろいねの稲架掛け



復元土器を用いた炊飯実験

環境教育による人材育成

大学の環境教育

香川大学では、様々な環境に関連する授業科目を設置し、環境問題に関心を持ち、率先して行動できる人材の育成に力を入れています。

学部・研究科名	授業科目名	学部・研究科名	授業科目名	学部・研究科名	授業科目名
教育学部	人間環境学Ⅰ	創造工学部	環境工学	インターナショナルオフィス	地域社会におけるSDGs達成への取り組み
	人間環境学Ⅱ		都市環境デザイン概論		プロジェクトさぬき【イ】
	化学概論Ⅱ		環境と都市のリスク	大学教育基盤センター	プロジェクトさぬき【ロ】
	社会学Ⅱ		住環境デザイン演習		自然科学へのいざない
	経済学Ⅱ	創発科学研究科	資源・エネルギー論		自然科学基礎実験
経済学部	環境システム論		水資源と水循環の科学		地域社会におけるSDGs達成への取り組み
	商品実験		緑化の理論と技術		プロジェクトさぬき
	資源エネルギー論		水空間生態学		身の回りの環境問題A
	(特)Plastics, Circular Economy and the Environment	農学部	環境基盤科学		身の回りの環境問題B
医学部	まちづくり論		環境エネルギー変換工学		瀬戸内海の環境問題と持続的利用
	衛生学		水圏環境学		知プラe科目 昆虫と環境
	公衆衛生学	農学研究科	緑地管理学		知プラe科目 人工魚礁の開発と環境保全
創造工学部	関係行政論 (社会医学・関係行政論)		人類生態学		知プラe科目 四国の自然環境と防災 その1
	瀬戸内海の環境問題と持続的利用		環境科学		知プラe科目 四国の自然環境と防災 その2
	人工魚礁の開発と環境保全		海洋科学		知プラe科目 海洋地球科学概論
	四国の自然環境と防災		水産環境学		里海から地域の暮らしを考える
	環境政策		無機化学		歴史学E
	住環境学		沿岸生産環境学		環境史：新たな歴史的アプローチへの挑戦
	環境生態学		水環境科学		
	河川環境マネジメント		土壌環境学		
	海域環境マネジメント		フィールド環境実験Ⅰ		
	建設環境マネジメント		フィールド環境実験Ⅱ		
	水環境マネジメント実験		海洋科学特論Ⅰ		
	水環境マネジメント演習		浅海生産環境学特論		
			環境生態学特論Ⅰ		
			環境生態学特論Ⅱ		
			土壌環境学特論Ⅰ		
			土壌環境学特論Ⅱ		

TOPICS

省エネ巡視の実施

施設環境部では、エネルギー使用量が増加する夏季・冬季の年2回、各部局のエネルギー管理担当者を対象とした「省エネ巡視」を実施しています。

巡視では、各部局の省エネ活動状況、空調機の設定温度やフィルター清掃の実施状況、冷蔵庫の設定温度などを確認するとともに、前年度のエネルギー使用量等を共有し、各施設の状況に応じた省エネの取組について意見交換を行っています。

また、LED照明への更新などの具体的な取組についても情報提供を行っています。

今後も、各部局と連携しながら省エネ活動を推進し、エネルギー使用量の削減に取り組んでいきます。



省エネ巡視の実施状況



教育学部における省エネ活動のポスター



フィールド実習を通じた学び ～香大実りポークなどの取組～

農学部 諸隈 正裕 教授・農場長



香川大学
農学部附属農場
ホームページ内
農場ブランド
「香大実りポーク」

農学部附属農場には作物栽培部、果樹部、畜産部、蔬菜花卉(き)部の4部門があり、学部専門科目として2年後期から3年前期にアグリサイエンスコースを対象に「実験実習I、II」、3年前期に「フィールド実習I」を開講し、農学の基礎理論と管理技術を理解することを目的として農業の生産現場における実践的なフィールド実習を行っています。

農学部附属農場では野菜や果物など多くの作物を生産販売していますが、販売基準に満たないものは廃棄処分となるためこれらの削減と活用が大きな課題であり、改善のための取り組みをいくつか行っています。各部門では栽培管理を工夫して生産物の販売基準に満たないものを減らすように努めており、その方法については実習中随所で説明しています。例えば、ジャガイモでは適期に土寄せを行うことで販売できない緑化イモを減らすことができます。畜産

部では、約10年前から桃、ブドウなどの出荷基準に満たない果物を豚の出荷前に一定期間与えることで本来廃棄処分となるものを有効活用する取り組みを行い、廃棄物削減に貢献しています。ウメやモモなど異なる果物を与えて育てた豚肉の食べ比べ(食味試験)を本実習で行ったところ、果物の種類により豚肉の食味が異なることがわかりました。収穫ロス削減の取り組みが新たな発見につながりました。そこでこれらの豚肉に「香大実りポーク」という名称を付け、2025年度に農学部収穫祭や学内食堂における期間限定販売を行いました。今後大学産ブランド豚肉として展開できるように成分分析等を進めて行く予定です。

本実習を通して、受講生には生産現場における廃棄物問題に関して多角的にアプローチできることを学んでほしいと考えています。



収穫ロス削減を目指した豚肉生産(香大実りポーク)



果樹の実習風景(モモの袋かけ)



冷凍したブドウ



ロゴマーク

大学概要

環境マネジメントの概要

SDG5アクションプラン

環境研究活動の紹介

環境教育による人材育成

地域への環境貢献

学生主体の活動

国際貢献活動

環境負荷の低減活動

環境報告ガイドライン対照表

編集後記



教育学部附属学校園の環境教育

幼稚園では子どものころから自然とのふれあいを大切に、命の大切さを教えています。小中学校になると理科、社会科、技術・家庭科、総合的な学習の時間などに身近な環境問題から地球規模での環境問題を学んでいます。

附属学校名	対象学年	授業科目名	実施内容
附属高松小学校	全学年	縦割り活動	・竹林を資源として捉え、竹を生かした作品づくりを通して環境保全について考える学習を行った。
	5年	国語	・環境保全をテーマに、ドラえものの道具があるとしたら何が有効かを考え、未来の環境を主体的に想像する学習を行った。
		社会	・環境保全に携わる人へのインタビューを通して、取組の実際や思いを知り、自分たちの行動を見直す学習を行った。
附属幼稚園 高松園舎	4～5歳児	国語	・海ごみ問題を題材に、原因や影響を調べ、自分たちができる行動を考えた。
		家庭科 理科	・エアコンに頼らず、風や日よけなど涼を生活に取り入れる工夫を考える学習を行った。 ・太陽光や風力などを例に、持続可能なエネルギーの大切さについて考える機会を得た。
附属高松中学校	1年	技術・家庭	・身近な生き物や植物との関わりの中で、生命の不思議さや尊さについて考え、大切にしようとする。
	2年	技術・家庭	・様々な素材に触れて遊ぶ中で、大切に使うことや、その素材の違いに気づき、捨てる際には分別が必要であることを知る。
	3年	技術・家庭 保健体育	・調理と食文化 ・持続可能な食生活 ・健康で快適な室内環境の工夫 ・持続可能な消費生活 ・持続可能な衣生活 ・持続可能な住生活 ・持続可能な家庭生活 ・健康と環境(飲料水、空気、廃棄物の衛生的管理)
附属幼稚園 (坂出)	3、4、5歳児	保育(園外保育)	・園外保育で自然との触れ合いを広げ、深めるほか、公共施設の利用の仕方を知る。また、地域と関わる。
		保育(栽培活動)	・季節の野菜・草花の栽培を通して関心を広げるとともに、親しみをもって世話をし、食育と関連付けける。
		保育(虫の採集・飼育)	・園庭の虫を捕まえて飼育することで、愛情や命について考えていく。
		保育(生き物の飼育 うさぎ・メダカ等)	・生き物の飼育を通して、命や成長する喜びを感じ、いたわったり大切にしたりしようとするようになる。
		保育(自然物を活用した遊び)	・自然の植物等を遊びに生かして楽しむ中で、そのもののよさや特性に気付いていく。
附属坂出小学校	1年	図画工作科	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		生活科	・自然の植物等を遊びに生かして楽しむ中で、そのもののよさや特性に気付いていく。
		総合的な学習の時間	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		社会科	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
	5年	総合的な学習の時間	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		国語	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		社会科	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
	6年	家庭科	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		国語	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		理科	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
附属坂出中学校	1年	外国語	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		社会科	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		理科	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
	2年	社会科	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		技術・家庭(家庭分野)	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		技術・家庭(技術分野)	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
	3年	保健体育	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		理科	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		技術・家庭(技術分野)	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
	1～3年	保健体育	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		美術	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		総合的な学習の時間(CAN)	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
附属特別支援学校	小学部	理科	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		技術・家庭(家庭分野)	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		技術・家庭(技術分野)	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
	中学部	保健体育	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		理科	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		技術・家庭(技術分野)	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
	高等部	保健体育	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		美術	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。
		総合的な学習の時間(CAN)	・木を生き物として捉え、元気がない木のための行動を考え、実行に移し、生命の営みや不思議を体験する。

大学概要

環境マネジメントの概要

SDGsアジェンダプラン

環境研究活動の紹介

環境教育による人材育成

地域への環境貢献

学生主体の活動

国際貢献活動

環境負荷の低減活動

環境報告ガイドライン対照表

編集後記



「MIRAI協働の学び」 ～学校周辺の身近なところから考える。～

香川大学教育学部附属高松中学校



香川大学教育学部
附属高松中学校
ホームページ

附属高松中学校では、「MIRAI協働の学び」として自分たちの身の回りの環境に関する活動をしています。



学校周辺の水路の調査の様子

1つ目は、外来種調査です。学校周辺の用水路等の調査を行いました。在来種がどうして減っているのか、昔からの景観が損なわれている原因は何なのかを考え、水槽に用水路の環境を再現したり、調査した生き物の特徴などをまとめ校内に掲示したりして、環境の変化が分かりやすく学べるような活動を行いました。

2つ目は、清掃ゲームです。学校周辺の環境をただきれいにするだけでなく、「どうせやるなら楽しく清掃」をテーマにゲームとスポーツを融合した活動を考えました。地域のごみ拾いに全員で出かけ、そのあと校内に戻りゲームを行い、その結果によって拾ってきたゴミを分配し、最終的に多くのゴミを拾ったチームの勝ちという活動を行いました。



学校周辺のゴミ拾いを終えて



校内の清掃も同時に行いました。



ウェルビーイング弁当!

香川大学教育学部附属坂出中学校・家庭科2年生



香川大学教育学部
附属坂出中学校
ホームページ

私たちが日々口にする食材の背景にある環境問題や労働問題、さらには大量生産・大量消費が生み出すごみ問題について理解を広げます。特に、安くて便利な食品ほど環境への負荷が大きくなりやすいことや、プラスチック容器が地球規模の課題となっている現状を、具体的な事例を通して学習します。こうした学びをもとに、生徒一人ひとりが自分の生活スタイルに合わせて、エシカルフード(環境や人に配慮

した食品)を選ぶ視点を身につけます。また、食品ロスを減らす工夫や、容器包装をできるだけ使わない買い物の仕方など、持続可能な社会に向けて自分ができる行動を考え、実践につなげることを目指しています。自分と地球の未来をより良くするために、日々の食選択を見つめ直すきっかけとなる授業として取り組んでいます。



ウェルビーイング弁当授業風景

大学概要

環境マネジメントの概要

SDGサステイナブルプラン

環境研究活動の紹介

環境教育による人材育成

地域への環境貢献

学生主体の活動

国際貢献活動

環境負荷の低減活動

環境報告ガイドライン対照表

編集後記

地域への環境貢献

13

気候変動に
具体的な対策を

14

海の豊かさを
守ろう

15

陸の豊かさも
守ろう

大地の成り立ちから香川の魅力を発見・発信する
せとうち讃岐ジオパーク構想推進モデルの構築
in小豆島

地域・産官学連携戦略室 長谷川 修一 特命教授



関連ホームページ



採石場跡の活用事例を調査

本事業の目的は、香川県全域をユネスコ世界ジオパークへの申請に必要な大地の遺産、大地の上に成り立った生態系などの自然遺産、そして地域の風土に根付いた文化遺産を選定することです。また、その選定過程を通じて、地域の関係者との連携を強化し、地域におけるジオパーク構想推進の機運を高めることです。私たちはその目的を達成するため、大学・地域共創プラットフォーム香川の令和7年度産学

官共創チャレンジ支援補助金の採択を受け、小豆島をモデル地区として、①勉強会、②現地調査、③サイトの価値の多面的評価、④人と大地の物語（ジオストーリー）の構築、⑤高校生を対象としたジオツアー、⑥成果報告会を実施しました。

本事業では、香川大学以外に香川県、土庄町、小豆島町、香川県地質調査業協会、讃岐ジオパーク構想推進準備委員会、小豆島高校等から参画いただきました。今後は、この活動を香川全域に拡大するとともに、香川大学内のジオパーク学術支援体制を強化し、せとうち讃岐ジオパーク構想の実現をめざします。

*ジオパーク：ユネスコの推進している大地の公園。日本には、11のユネスコ世界ジオパーク、48の日本ジオパークがある。四国には、室戸が世界、四国西予、土佐清水、三好が日本のジオパークに認定されているが、香川県にはジオパークはない。



三都半島のマントル直結安山岩



大坂城残石公園の残石



土庄町天然記念物蕪崎断層



ジオストーリーづくりのワークショップ



サイトを活用したジオストーリーづくり

せとうち讃岐

をユネスコ世界ジオパークに！

シンポジウム

日時

令和8年2月10日(火) 13:00-16:35

受付 12:30- 参加費無料

スケジュール

13:00-13:05

開会挨拶

香川大学学長 上野 寛生

13:05-13:10

来賓挨拶

香川県知事 池田 昌子

13:10-13:15

来賓挨拶

高松市市長 大崎 秀人

13:15-13:45

香川県のジオ資源の調査報告

香川大学特任教授 長谷川 修一

13:45-14:45

基調講演「ユネスコ世界ジオパークを創るには？」

日本ジオパーク委員会 委員長 渡辺 英人

15:00-16:30

パネルディスカッション「せとうち讃岐」をユネスコ世界ジオパークに！

パネリスト
香川県立内子高等学校教諭 佐藤 孝雄
小豆島町立小豆島高等学校教諭 佐藤 孝雄
株式会社ジオ・ラボ 代表取締役 佐藤 孝雄
北瀬ジオパーク推進委員会 委員長 佐藤 孝雄
アドバイザー 日本ジオパーク委員会 委員長 渡辺 英人
コーディネーター 香川大学特任教授 長谷川 修一

シンポジウム

シンポジウム

シンポジウム

4 質の高い教育を
みんなに

「図書室の中の学校プロジェクト」が育む、 新しい読書の空間

創造工学部 南 政宏 准教授

南政宏研究室
ホームページ

南研究室の3年生3名と

南研究室では高松市立太田南小学校と連携し、「図書室の中の学校プロジェクト」に取り組みました。このプロジェクトは、「本は図書室だけで読むもの」という考え方を広げ、校舎全体を子どもたちが自然に本と出会える空間へと変えていくことを目的とし河田教頭が立案しました。その一環として、校内の使われていなかったスペースを改修し、「ブルーサウナ」と「イエローコクーン」という二つの性質の異なる読書空間を学生がデザイン・制作しました。ブルーサウナは空を見上げる寝椅子のある空間、イエローコクーンは階段下の天井の低い落ち着いた畳敷きの空間です。

老朽化の進む公立小学校の学習環境は決して豊かなものではないことを目の当たりにし、子どもたちの目線に立って「どのような空間なら居心地が良いか」「どのような空間があれば本を読みたくなるか」を話し合い、学校の先生方とも意見交換を重ねながら設計を進めました。限られた予算や技術的な課題、既存施設を活用する難しさもありましたが、現場で試行錯誤を繰り返した経験は、学生にとって教室では学べない貴重な実践の機会となりました。完成後には、子どもたちが休み時間に自然と集まり、本を読んだり会話を楽しんだりする姿を見ることができ、読書をする子どもたちが増えています。

今後も南研究室では、香川県内の他の学校や地域と連携しながら、学びの場をより豊かにするデザインを広げていきたいと考えています。

本プロジェクトは、大学のリソースを地域社会へ還元するとともに、学生が地域課題の解決に主体的に関わる機会となりました。デザインの力で小学校に新しい価値を生み出し、生徒と本をつなぐ場を創ることが、地域社会への大きな貢献につながっていると考えています。



紐カーテン検討の様子

イエローコクーンのオープニングで
小学生に説明する学生たち

ブルーサウナ



イエローコクーン

大学概要

環境マネジメントの
概要SDGサステイナブル
プラン環境研究活動の
紹介環境教育による
人材育成

地域への環境貢献

学生主体の活動

国際貢献活動

環境負荷の
低減活動環境報告ガイド
ライン対照表

編集後記



丸亀ICTクラブ
ホームページ

「海ゴミ問題をAIプログラムで解決！」 瀬戸内海の家ゴミ問題を解決するための教育実践プログラムの開発

教育情報推進支援センター 林 敏浩 教授、創造工学部 藤本 憲市 教授
丸亀ICTクラブ

本活動では、瀬戸内海の家ゴミ問題を身近な地域課題として学ぶ「海ゴミ問題をAIプログラムで解決！」に取り組みました。牛島での海岸清掃では、落ちているゴミの種類や集まり方を調べ、なぜ海岸にゴミが届くのかを考えました。さらに、回収したプラスチックごみの画像を使い、AI(人工知能)が分類する

仕組みを学ぶワークショップを行いました。現地を見て、触れて、考える経験と最新技術の学びを結びつけることで、参加者が環境問題を自分事として捉えるきっかけになりました。今後は、この教育プログラムを地域や学校で活用し、海を守る行動の輪を地域社会へ広げていきます。



牛島で海岸清掃



プラスチックゴミの調査



海岸清掃を終えて



AIにプラスチックゴミの
形状を入力



ワークショップを終えて



善通寺市との連携による 「都市と地域を結ぶ、想いの架け橋事業」の実施

創造工学部 造形・メディアデザインコース 石塚 昭彦 教授
地域人材共創センター 神田 亮 講師



KBPホームページ



学生が制作したSNS

本学では、自治体や地域企業等と連携し、地域課題の解決や地域産業・就業への理解促進を目的とした実践型プログラム(「香川と都市圏の大学連携推進事業(KBP)」)を実施してきました。

2025年度は、善通寺市の地域住民や農業生産者との交流を通じて、地域課題の把握から企画立案、実践までを一貫して学ぶ「都市と地域を結ぶ、想いの架け橋事業」を、KBP連携大学である津田塾大学、芝浦工業大学及び地元大学である四国学院大学と連携して実施しました。本事業には延べ約60名の学生が参加し、フィールドワークやワークショップを経て、パシフィコ横浜で開催された「図書館総合展」で

活動成果を発信するとともに、東京都で「想いをつなぐチャレンジマルシェ」を実施しました。学生は善通寺市の農産物や加工品の販売、商品紹介、情報発信などを主体的に行い、地域の魅力や生産者の想いを伝える重要性を学びました。

活動を通じて、地域への愛着や当事者意識が醸成され、関係人口の創出につながる成果が得られました。今後も地域との継続的な連携を通じ、持続可能な地域づくりに貢献していきます。



チャレンジマルシェの様子
@千代田区お茶の水

学生主体の活動



KASASHIMASTUDIO
ホームページ

学生の手でつなぐ、笠島の町並みと暮らし

笠島プロジェクト

笠島プロジェクトでは、丸亀市本島町笠島に残る歴史ある町並みを未来へつなぐため、学生が地域の方々と活動しています。2025年度は、土壁の解体や左官による壁塗りを体験し、昔ながらの材料や職人の技を学ぶ施工ワークショップを実施しました。また、空き家となっていた古民家を、建築士の指導のもと学生の手で改修し、瀬戸内国際芸術祭の期間に一般公開したところ、500名以上が訪れました。古い建物を壊さず、今ある柱や壁、空間の魅力を生かして使い続けることは、ごみや資源の使用を減らすことにもつながります。地域の方や専門家、他大学の学生と力を合わせる中で、笠島に受け継がれてきた建物の知恵と人のあたたかさに触れました。これからも、

学びと交流が生まれる活動を重ね、笠島らしい風景と暮らしを次の世代へつないでいきたいです。

(創造工学部 清水 瑠璃)



地域の方々とともに支えた地域行事



笠島の魅力を伝える町並みガイド



伝統工法を学ぶ施工ワークショップ



改修した古民家を瀬戸芸で公開



「20年の歩みを力に、持続可能な直島の未来へ」

直島地域活性化プロジェクト



関連ホームページ

直島地域活性化プロジェクトは、2025年8月に設立20周年を迎えました。この記念すべき年に、全国からまちづくりに携わる大学生・教職員400名以上が参加する「全国まちづくりカレッジ」を主催し、地域の魅力やまちづくりについて交流する機会を創出しました。準備では、プログラム作成や会場設営などに苦労しました。その中で、早い段階から計画を立て、メンバー間で定期的に進捗を共有するこ

とで、役割分担を明確にしました。直島町のみなさまのご協力のもと、多くの学生たちと交流し、無事にイベントを成功させられたことは大きな成果です。今後も地域の方々とのつながりを大切にしながら、観光だけでなく、環境保全や持続可能な地域づくりにも目を向け、直島の魅力を次世代につなげる活動に取り組んでいきたいです。

(経済学部 三原 琉聖)



全国まちづくりカレッジ活動の様子1



全国まちづくりカレッジ活動の様子2



全国まちづくりカレッジ見送りの様子



全国まちづくりカレッジ懇親会の様子

大学概要

環境マネジメントの概要

SDGサステイナブルプラン

環境研究活動の紹介

環境教育による人材育成

地域への環境貢献

学生主体の活動

国際貢献活動

環境負荷の削減活動

環境報告ガイドライン対照表

編集後記



サイバー空間の安全・安心なまちづくり

香川大学サイバー防犯ボランティアSETOKU



SETOKU
ホームページ

SETOKUは、インターネットを安心して利用できる地域づくりを目指して活動しています。2025年度は、高松市内で、小学生を対象としたインターネットの正しい使い方を学ぶ授業や地域の皆さまに向けた犯罪被害防止の呼びかけ、詐欺サイトや危険なウェブサイトへの対策活動を行いました。

これらの活動を通じて、子どもたちが安全にインターネットを利用するための知識を身に付けると

もに、地域全体の防犯意識を高め、サイバー犯罪による被害を減らすことにつながっています。

活動では、新しい犯罪の手口を学び続けることにも苦労がありますが、活動に参加する学生にとっても、情報セキュリティに関する知識や実践力を身に付ける機会となっています。今後もこれらの活動を続け、安全なデジタル社会の実現に取り組んでいきます。

(創造工学部 佐藤 璃音)



メンバーの一部(懇親会にて)



サイバー空間の浄化活動



広報啓発活動



犯罪被害防止のための教育活動



「多言語マップと観光ガイドで伝える男木島の魅力」

香川大学OGIJIMAプロジェクトここから



@OGIIKOKO_0930
公式Instagram

私たちは、男木島の魅力をより多くの方に伝え、満足度の高い観光体験へつなげることを目指して、多言語マップの制作とガイドツアーを実施しました。従来の日本語版・英語版に加え、中国語版・韓国語版のマップを新たに制作し、最新の店舗情報に加えて、避難場所や危険箇所など安全性に配慮した情報も掲載することで、観光客が安心して島内を周遊できる環境を整えました。また、ガイドでは、島の自然や歴史、文化を紹介しながら、その魅力を分かりやすく伝えました。

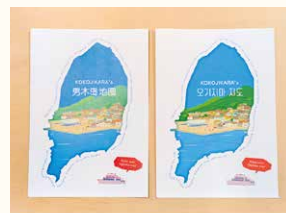
関係者との調整やマップ・ガイド内容の検討に試



団体観光客に対する
ガイド活動の様子

行錯誤を重ねましたが、実地研修やガイドの実践を通して地域への理解を深め、自分たちの言葉で男木島の魅力を発信できたことに大きなやりがいを感じました。今後も持続可能な観光を目指し、男木島の魅力をより多くの方へ届けていきます。

(経済学部 木村 萌々花)

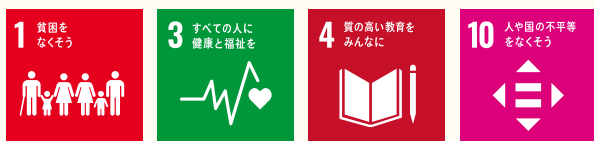


作成した多言語観光マップ
(中国語版・韓国語版)



ガイドツアー
実地練習の様子

国際貢献活動



香川大学
ホームページ



JICAホームページ

香川大学医学部老年看護学講座と JICAによるミクロネシア短期大学への 老年看護教育支援の概要

医学部老年看護学 山本 美輪 教授、西村 美穂 学内講師、桑原 唯 助教



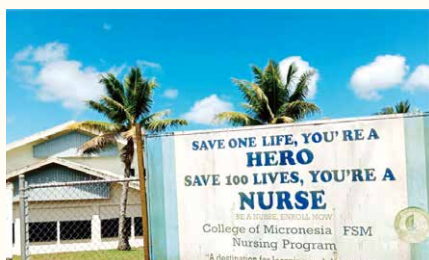
香川大学生による授業の様子

香川大学医学部老年看護学講座は、2025年JICAと連携派遣の締結を行い、2025～2027年の3年間、ミクロネシア短期大学(COM)へ老年看護教育支援を行い、今年度2026年で2回目の派遣が無事完了しました。今回は、この活動内容について、ご報告させていただきます。

ミクロネシア連邦は、太平洋に位置する4州から成る島国で、首都はポンペイ州のパリキールです。英語と現地語が使われ、キリスト教が主な宗教です。水産業が中心で輸入依存が高く、米国の財政支援により経済が支えられています。また、ミクロネシア連邦の医療は、州立病院4か所と私立病院1か所で支えられていますが、設備や人材が大きく不足しています。

CT検査が可能な施設は1か所のみで、読影は国外に依頼しています。看護師は人口1,000人あたり約2.1人、医師は0.6人と少なく、精神科医は国全体で1名のみです。このため、重症患者の診断や治療が遅れやすく、医療体制の脆弱さが課題となっています。

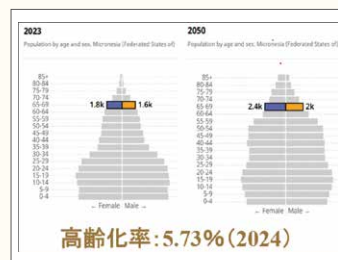
ミクロネシア短期大学(COM-FSM)はミクロネシア連邦唯一の高等教育機関で、6つのキャンパスを有する国立短期大学です。看護学科にはCNA・LPN・RNの3課程があり、計42名の学生を2名の教員で指導しています。臨床実習は16週間で、医療補助や療養援助を中心に学びますが、近年は外部支援の打ち切りにより教育体制が脆弱となり、継続的な支援が不可欠な状況です。本学の派遣隊員は各年1か月間ずつ2名で、現地教員と協働しながら、シミュレーション教材を用いた高齢者体験演習や認知症ケア、回想法を取り入れたレポート課題などを通じて教育強化を進めています。CNA・LPN・RNコースの学生に対し、臨床実習支援や教材提供を行い、看護教育の質向上を目指しており、来年の3回目の派遣に向けて準備を進めています。JICAとともに、ミクロネシアの看護職育成や老年看護学教育の質向上に寄与できるよう、今後も尽力してまいります。



ミクロネシア連邦短期大学看護学科



ミクロネシア連邦とポンペイ州の位置



ミクロネシア連邦の高齢化率

大学概要

環境マネジメントの概要

SDGサウンズプラン

環境研究活動の紹介

環境教育による人材育成

地域への環境貢献

学生主体の活動

国際貢献活動

環境負荷の低減活動

環境報告ガイドライン対照表

編集後記

環境負荷の低減活動

エネルギー使用量削減目標と実績

削減目標

香川大学では「エネルギーの使用の合理化等に関する法律」(省エネ法)及び「地球温暖化対策の推進に関する法律」(温対法)に基づき、「香川大学省エネルギー対策に関する規程」(以下、「規程」)及び「エネルギー管理に関する基本計画」(以下、「基本計画」)を策定し、省エネルギー対策の推進を図っています。

「規程」では、学内のエネルギー管理体制及び担当者の責務などを定めています。

「基本計画」では、2024年から2028年度までの5年間に、エネルギー使用量及び温室効果ガス排出量を2022年度を基準とした原単位(建物延べ床面積あたりのエネルギー使用量及び温室効果ガス排出量)で5%削減することを努力目標とし、取組を進めています。

省エネにご協力ください

●照明の引き
●無理のない範囲で室内温度を調整
※建物全体に対する節電効果: 12.7%
(執務室の照明を半分程度引きした場合)

●冷房時室温 28℃
●無理のない範囲で室内温度を調整
※建物全体に対する節電効果: 4.1%

●空調機等停止
●使用していないエリアの空調機を停止
※建物全体に対する節電効果: 2.4%

●OA機器
●長時間を離れるときは、OA機器の電源を切るか、スタンバイモード
※建物全体に対する節電効果: 2.8%

●換気扇の清掃
●換気扇のフィルター清掃により埃やゴミの落下防止

※記載している節電効果は、建物全体の消費電力に対する目安です。
※節電については節電効果は電気料金に反映していません。
※一定の条件下での試算結果です。各々の建物の利用状況により削減効果は異なります。
※節電を怠ると、火災、爆発、安全上及び管理上不適切なものとなる場合があります。

省エネポスター(夏)

暖房時室温19℃
無理のない範囲で室内温度を調整
建物全体に対する節電効果→3.4%(暖房温度を2℃下げた場合)

●照明の引き
可能な範囲で照明を引き
建物全体に対する節電効果→7.7%(執務室の照明を半分程度引きした場合)

冬の省エネにご協力下さい

●空調機等停止
使用していないエリアの空調機を停止
建物全体に対する節電効果→1.7%

●全熱交換器清掃
フィルター汚れを取り除き
換気効率と熱交換性能向上

●OA機器
長時間を離れるときは、OA機器の電源を切るか、スタンバイモード
建物全体に対する節電効果→3.6%

※記載している節電効果は、建物全体の消費電力に対する目安です。
※空調機等については節電効果は電気料金に反映していません。
※一定の条件下での試算結果です。各々の建物の利用状況により削減効果は異なります。
※節電を怠ると、火災、爆発、安全上及び管理上不適切なものとなる場合があります。

省エネポスター(冬)

実績

香川大学におけるエネルギー使用量及び温室効果ガス排出量に係る環境効率率は下表のとおりです。環境効率は、建物延べ床面積あたりのエネルギー使用量と温室効果ガス排出量(以下「原単位」という。)により算出しています。

エネルギー使用量及び温室効果ガス排出量は、基準年度(2022年度)及び前年度と比較して、いずれも減少しました。

減少理由は、全学的に取り組んでいる省エネ活動や建物の省エネ改修など、さまざまな環境負荷低減活動によるものと考えられます。

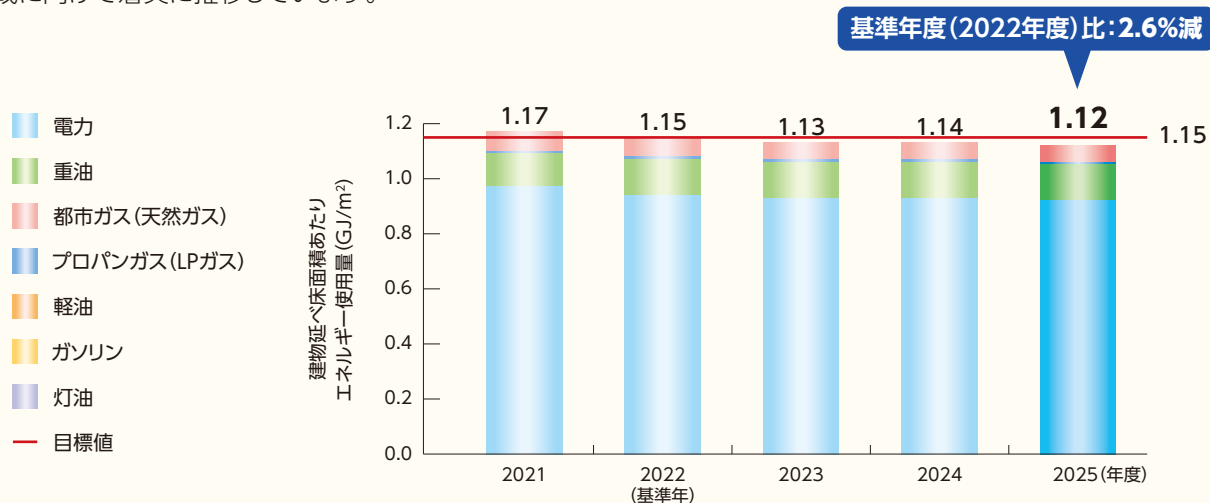
		単位	2022年度 (基準年度)	2024年度	2025年度		
			実績	実績	実績	基準年度比(%)	前年度比(%)
エネルギー使用量		GJ	334,633	332,426	326,904	△ 2.3	△ 1.7
温室効果ガス排出量		t-CO ₂	21,173	19,384	18,720	△ 11.6	△ 3.4
建物延べ床面積		m ²	291,988	290,968	291,839	△ 0.1	0.3
環境効率 (原単位)	建物延べ床面積あたりの エネルギー使用量	GJ/m ²	1.15	1.14	1.12	△ 2.6	△ 1.8
	建物延べ床面積あたりの 温室効果ガス排出量	t-CO ₂ /m ²	0.073	0.067	0.064	△ 12.3	△ 4.5

※エネルギー使用量には、太陽光発電使用量は含みません。

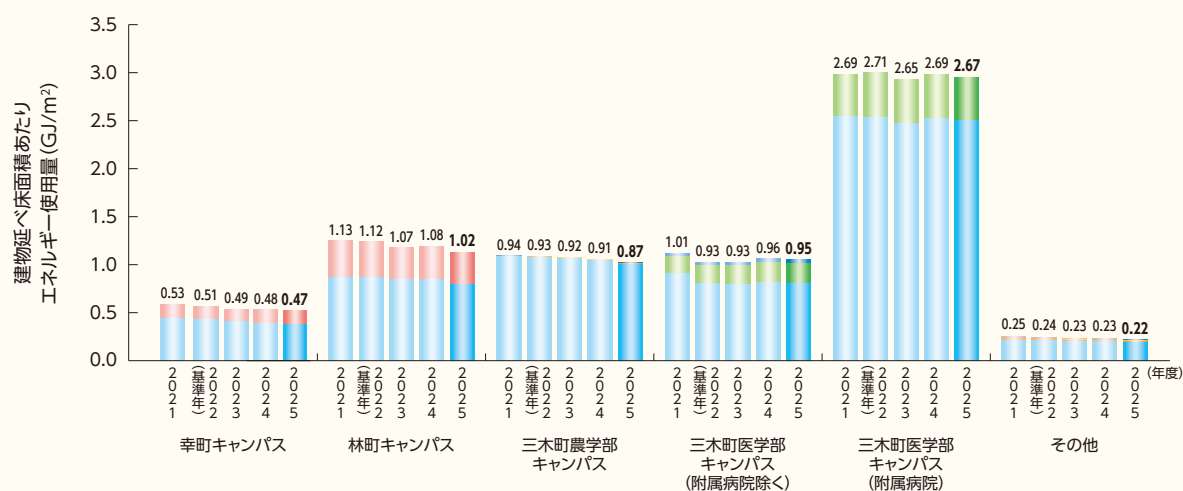


〈建物延べ床面積あたりエネルギー使用量〉

2025年度は、全学的な省エネ活動や建物の省エネ改修等の取組により、基準年度比2.6%の削減となり、目標達成に向けて着実に推移しています。

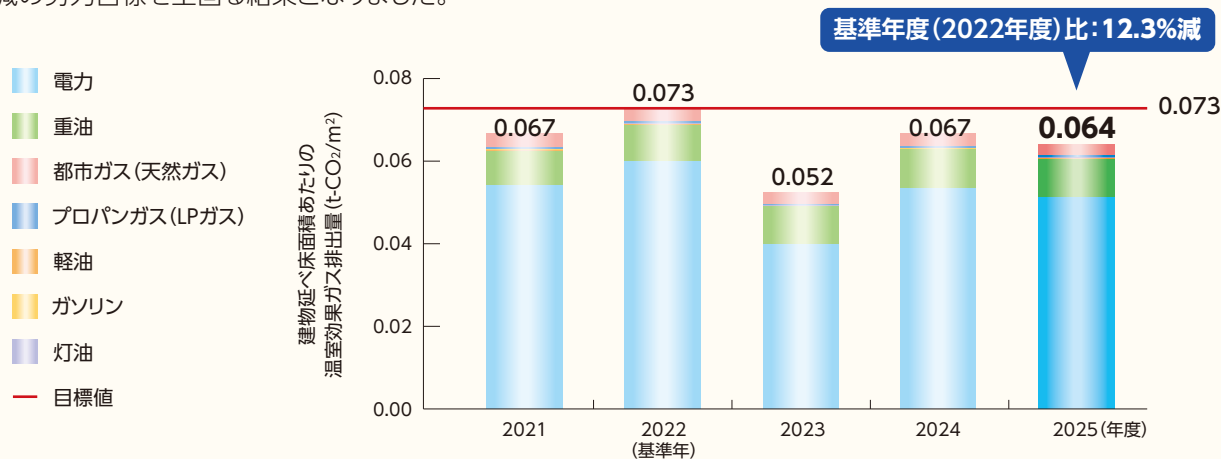


〈キャンパスごとの建物延べ床面積あたりのエネルギー使用量〉



〈建物延べ床面積あたりの温室効果ガス排出量〉

2025年度は、全学的な省エネ活動や建物の省エネ改修等の取組により、基準年度比12.3%の削減となり、5%削減の努力目標を上回る結果となりました。



大学概要

環境マネジメントの概要

SDGサステイナビリティプラン

環境研究活動の紹介

環境教育による人材育成

地域への環境貢献

学生主体の活動

国際貢献活動

環境負荷の低減活動

環境報告ガイドライン対照表

編集後記

マテリアルバランス

2025年度(令和7年度)のエネルギー使用量、温室効果ガス排出量など、香川大学の教育、研究活動に伴う環境負荷の状況は下表のとおりです。各使用量及び排出量は基準年度(2022年)と比較して、重油、ガソリン及び水の使用量、廃棄物排出量並びに総排水量はいずれも増加しました。

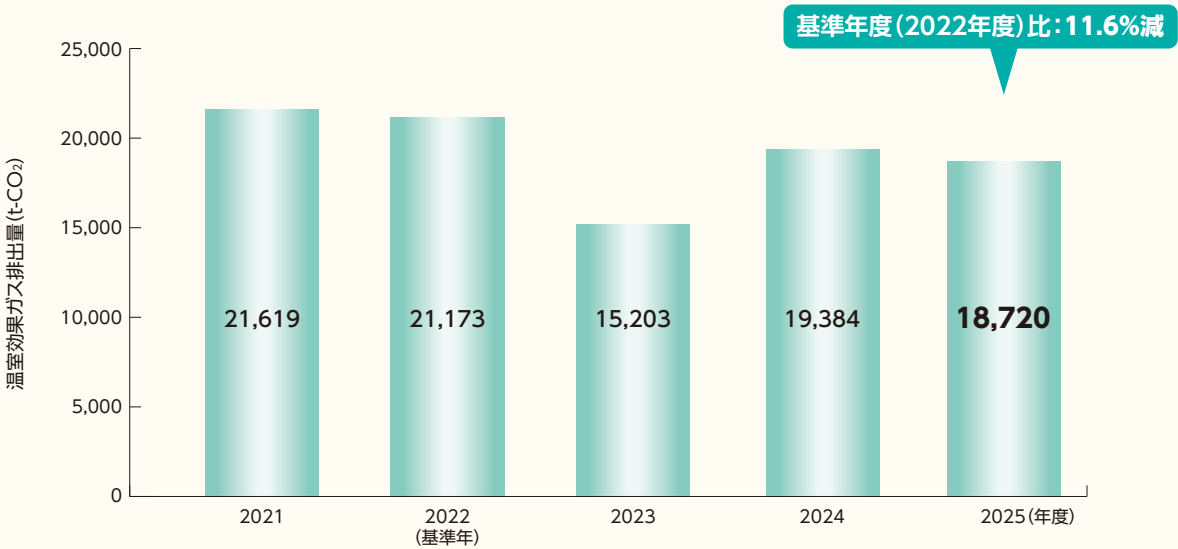
前年度と比較して、水使用量以外は減少しました。

各エネルギー使用量等について、主な低減対策や増加理由を次ページ以降に紹介します。

今後も、継続的な省エネ活動等により、エネルギー使用量・温室効果ガス排出量等の削減に取り組んで参ります。

			単位	2022年度 (基準年)	2024年度	2025年度		
				実績	実績	実績	基準年比	前年度比
INPUT	エネルギー使用量	電力使用量	千kWh	31,881	31,419	30,945	-2.9%	-1.5%
		重油使用量	kL	957	986	976	2.0%	-1.0%
		ガス使用量	千m ³	435	425	408	-6.2%	-4.0%
		軽油使用量	kL	18.0	21.1	17.9	-0.4%	-15.0%
		ガソリン使用量	kL	12.0	14.6	14.2	18.1%	-3.0%
		灯油使用量	kL	10.0	10.2	8.6	-13.7%	-15.3%
	紙使用量		t	100	82	81	-19.0%	-1.2%
	水使用量		千m ³	125	125	129	3.2%	3.2%
OUTPUT	温室効果ガス排出量		t-CO ₂	21,173	19,384	18,720	-11.6%	-3.4%
	廃棄物排出量		t	1,552	1,571	1,560	0.5%	-0.7%
	総排水量		千m ³	103	115	112	8.7%	-2.6%

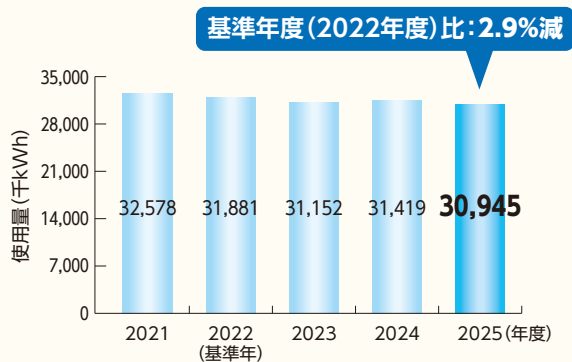
●温室効果ガス排出量





●エネルギー使用量

〈電力使用量〉



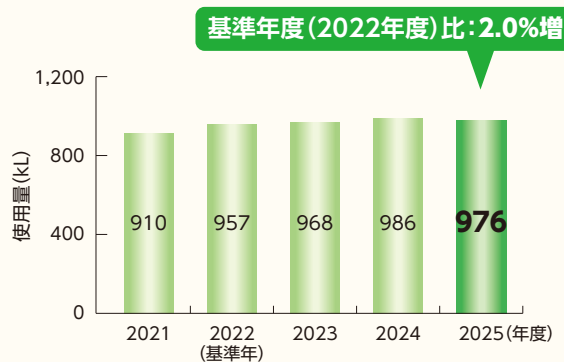
使用料金 (百万円)	574	728	720	718	629
---------------	-----	-----	-----	-----	------------

【主な低減対策】

- 適切な空調温度設定の実施(冷房28℃、暖房19℃)
- 照明及びPCモニタのこまめな電源オフの実行
- 省エネ型設備(空調機、LED照明など)への更新
- 昼休みの消灯 ●省エネ巡視の実施
- クールビズ・ウォームビズの励行
- 空調使用時のサーキュレーター等の活用
- 廊下の照明の間引き



〈重油使用量〉



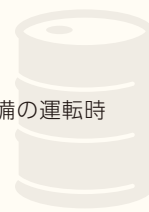
使用料金 (百万円)	69	82	88	89	94
---------------	----	----	----	----	-----------

【主な低減対策】

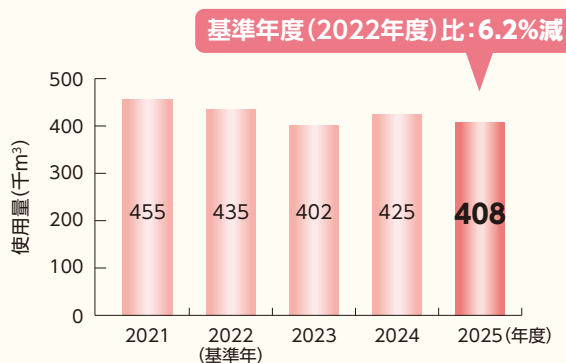
- ボイラーの運転時期の制限
- 蒸気ヘッダー、バルブに保温材の設置(医学部)
- 蒸気の還水の再利用(医学部)
- ボイラーの運転台数制御(医学部)
- ボイラーの排熱再利用(医学部)

【主な増加理由】

- 使用電力ピークカットによる自家発電機設備の運転時間の増加(医学部)



〈ガス使用量〉



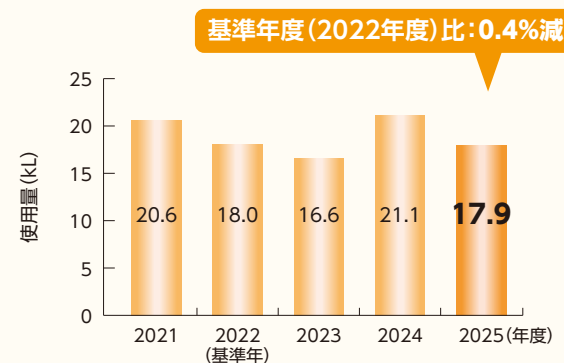
使用料金 (百万円)	48	63	52	59	48
---------------	----	----	----	----	-----------

【主な低減対策】

- 適切な空調温度設定の実施(冷房28℃、暖房19℃)
- 中間期のエアコン停止
- ガスヒートポンプ式空調機運転の集中コントローラーによる間欠運動の実施
- ガスヒートポンプ式空調機から電気式空調機への更新



〈軽油使用量〉



使用料金 (百万円)	2.1	2.3	2.2	2.9	2.6
---------------	-----	-----	-----	-----	------------

【主な低減対策】

- アイドリングストップ



大学概要

環境マネジメントの概要

SDGサステイナブルプラン

環境研究活動の紹介

環境教育による人材育成

地域への環境貢献

学生主体の活動

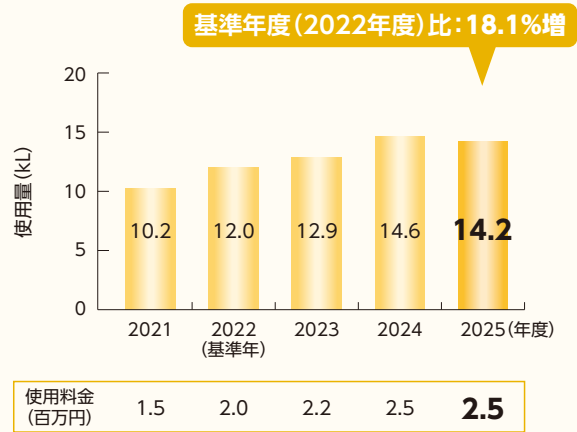
国際貢献活動

環境負荷の低減活動

環境報告ガイドライン対照表

編集後記

〈ガソリン使用量〉



【主な低減対策】

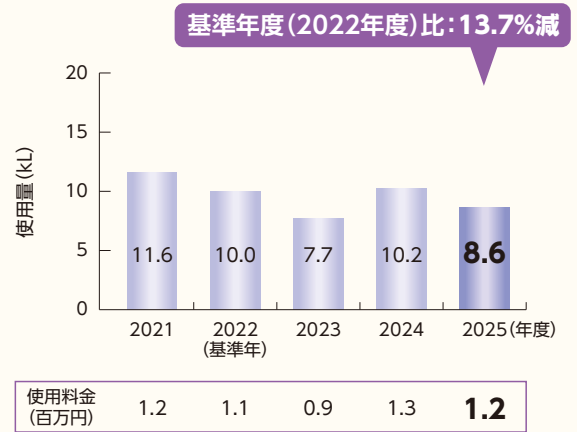
- ハイブリッド車、低燃費車の導入
- アイドリングストップ

【主な増加理由】

- 教育・研究活動の活性化に伴う車利用の増加等により、ガソリン使用量が増加したと考えられます。低減対策の周知を図り、効率的な車利用に努めます。



〈灯油使用量〉



【主な低減対策】

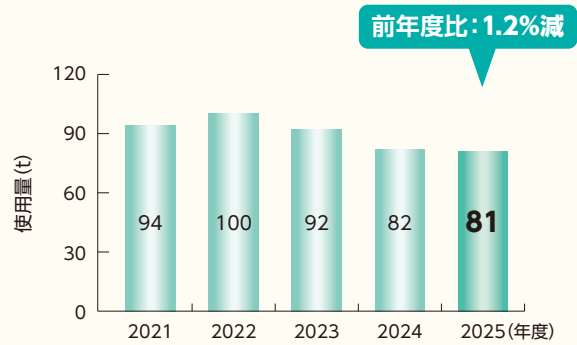
- 適切な空調温度設定の実施
- 行事以外での石油ストーブの使用を制限



●省資源の推進

香川大学では省資源を推進し、紙、水使用量を削減することを目標とし、各種対策に取り組んでいます。

〈紙使用量〉



【主な低減対策】

- スキャナでのPDF(電子データ)化
- 両面・縮小印刷の実施
- 裏紙の利用
- 会議のペーパーレス化



〈水使用量〉



【主な低減対策】

- 節水シールの貼付
- 節水型設備への更新
- 止水栓の調整
- 循環水の利用
- 節水コマ、擬音装置の設置

【主な増加理由】

- 教育・研究活動の活性化や附属病院の患者数の増加等が原因で、水使用量が増加したと考えられます。低減対策の周知を図るとともに、日々の水使用量の把握・分析・周知を行い、効率的な水利用を推進します。

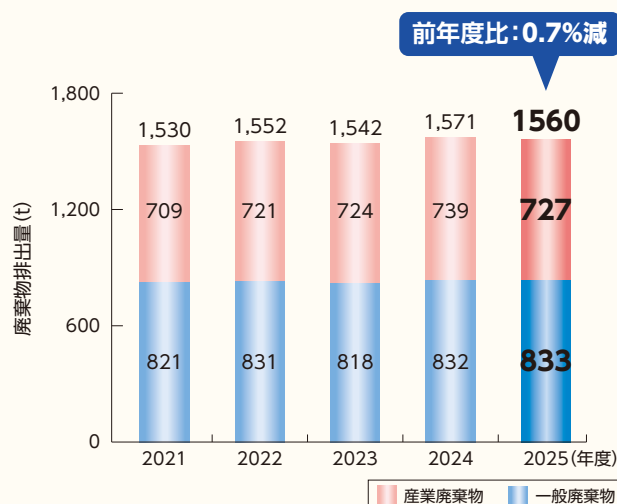




●廃棄物の適正管理

香川大学から排出される廃棄物は、一般廃棄物(可燃ごみ、びん、ペットボトルなど)と産業廃棄物(汚泥、廃アルカリ・廃酸、特別管理産業廃棄物など)に分類され、適正に管理し、処理・リサイクルを行っています。

2025年度(令和7年度)は、廃棄物排出量は1,560tで、前年度より0.7%減少しました。



●新エネルギー導入による環境負荷低減

香川大学では、幸町キャンパス、林町キャンパス、及び附属学校園において、太陽光発電を導入しています。各施設の発電設備容量は右表のとおりです。



太陽光発電システムパネルの表示(附属坂出中学校)

〈太陽光発電設備ごとの発電設備容量〉

設備設置箇所	発電設備容量(kW)
幸町キャンパス	幸町北1号館 20
	幸町北8号館 20
	研究交流棟 20
	大学会館 50
林町キャンパス	創造工学部 40
	附属高松小学校 10
附属学校園	附属高松中学校 10
	附属坂出小学校 10
	附属坂出中学校 10
	附属幼稚園(高松) 5
	附属幼稚園(坂出) 5
	附属特別支援学校 10
	附属研究施設 芸術未来研究場せとうち 1.6
合 計	211.6

●循環水利用の取り組み

学内では循環水利用の取り組みを進めています。主な取り組み内容は、下表のとおりです。循環水として、2025年度(令和7年度)に再利用された水の量は、37,364m³でした。

対象地区	取り組み内容
三木町医学部キャンパス	生活排水処理水をトイレ洗浄水、消火用水等に再利用
林町キャンパス	生活排水を雨水とともに浄化処理後、トイレ洗浄水、植物散水及び測定器の冷却水に再利用
農学部附属農場	家畜糞尿処理水を果樹園等の灌漑用水に再利用



節水シール

大学概要

環境マネジメントの概要

SDGサファティプラン

環境研究活動の紹介

環境教育による人材育成

地域への環境貢献

学生主体の活動

国際貢献活動

環境負荷の低減活動

環境報告ガイドライン対照表

編集後記



省エネルギー対策のための施設整備

香川大学では、「香川大学キャンパスマスタープラン2022」及び「香川大学SDGsアクションプラン」等に基づき、環境負荷の低減を図るため、教育・研究機能の強化等を目的とした施設改修工事に併せて、省エネルギー化に取り組んでいます。

令和7年度に実施した、三木町医学部（基礎臨床研究棟）・農学部（共創研究棟）の大規模改修工事では、屋根（屋上）や外壁への断熱材吹付、窓ガラスへの複層ガラス採用などにより建物の断熱性能を高め、外気の暑さや寒さが室内に伝わりにくくしています。

また、LED照明や高効率空調設備など、省エネルギー性能の高い設備を導入し、照明・空調などにかかるエネルギー使用量の削減を図っています。



基礎臨床研究棟（外観写真）

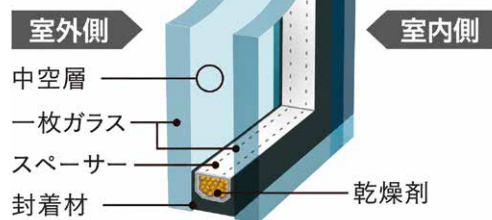


共創研究棟（内観写真）



外壁や屋根の室内側に厚さ50mmの断熱材を吹き付け、外気の暑さや寒さが室内に伝わりにくくすることで、空調に使用するエネルギーを削減

複層ガラスの採用



外部に面する窓に複層ガラスを採用し、外気の暑さや寒さが室内に伝わりにくくすることで、空調エネルギーを削減

さらに、部屋の快適な温度・湿度を保ちながら空気だけを入れ替える全熱交換器・CO₂センサーの導入や、人感・照度センサーによる照明制御など、利用状況に応じて自動でエネルギー使用量を抑える仕組みを整えました。

これらの取組により、本改修は国の定める省エネ設計指標（※ZEB Oriented相当）を達成しました。

※ZEB Oriented: 同規模の建物と比べて、年間のエネルギー使用量を40%以上削減する設計指標



排水の水質に係る管理状況

香川大学では、関係法令および自治体の基準に基づき、各キャンパスにおける排水の定期的な水質測定・監視を行っており、水質管理の徹底に努めています。

2025年度(令和7年度)に実施した水質検査におきましても、異常な数値は検出されず、すべてのキャンパスにおいて良好な管理状況が維持されていることを確認しました。

TOPICS



第60回地盤工学研究発表会にて 優秀論文発表者賞を受賞しました！

大学院創発科学研究科(工学領域)博士前期課程
阪村 七々郁 さん

2025年7月22日 第60回地盤工学研究発表会にて、「魚骨由来の吸着材を用いたアンモニウムイオンの吸着」(著者：阪村七々郁、尾崎遥、末永慶寛、吉田秀典)という題目での発表で、本学大学院創発科学研究科(工学領域)博士前期課程の阪村七々郁さんが、優秀論文発表者賞を受賞しました。

(以下、論文内容等記載)

本研究では、重金属などの吸着実績を持つ魚骨由来のヒドロキシアパタイト(FbA)におけるアンモニウムイオン(NH_4^+)の吸着能を評価することを目的として、 NH_4^+ の吸着試験を行った。試験では、魚骨の洗浄有無、異なる焼成温度(写真1～3を参照)、個数、魚種、 NH_3aq 初期濃度、初期pHの値について条件を変化させた。その結果、以下のような知見が得られた。

- ・ **魚骨の洗浄**：魚骨を洗浄した方が、 NH_4^+ に対するFbAの吸着能が高まる
- ・ **焼成温度**：焼成時に NH_3 の排出が進行する 900°C が最も NH_4^+ を吸着しやすい
- ・ **魚種**： NH_4^+ 吸着能に関して、魚種の違いによる差異は認められない
- ・ **NH_3aq 初期濃度**：今回実施した濃度条件では、 NH_3aq 初期濃度の違いよりも、FbAは天然由来であることによる個体差の影響の方が大きい
- ・ **初期pHの影響**：pH調整を行って、初期pHを下げた場合、魚種によって上昇の程度に差がみられたことから、 NH_3aq 初期濃度と同様、初期pHよりFbAの個体差による影響の方が大きい

これらの知見より、改良等によって性能は向上する可能性があると考えており、例えば、FbA製造時の焼成温度を 500°C と 900°C の間に当たる $700\sim 750^\circ\text{C}$ としてpHの上昇を抑制することで、 900°C FbA以上の吸着が期待できると考える。さらに、FbAと炭化材料(特にバイオ炭など)と組み合わせることで、より一層、 NH_4^+ の吸着性能が向上する可能性があると考えている。



写真1 FbA(400℃焼成)



写真2 FbA(500℃焼成)



写真3 FbA(900℃焼成)



化学物質等の適正管理

香川大学では、多様な研究活動のため、様々な化学物質を使用しています。人や環境に影響を与える有害な化学物質については適正な管理を行っています。

●化学物質の管理

労働安全衛生規則等に基づき、「国立大学法人香川大学化学物質管理規程」を整備しています。本規程により、危険有害性を有する化学物質について、リスクアセスメントの結果に基づき、ばく露防止のための措置を適切に実施しています。

●PRTR制度対象化学物質の管理

PRTR制度対象化学物質は、購入・使用状況を管理記録簿に記入するなど管理の徹底を行っています。
(PRTR制度対象化学物質) 第一種指定化学物質：アセトニトリル、ジクロロメタン、ヘキサン、トルエン など

●毒物・劇物の管理

毒物、劇物及び特定の毒物の管理方法については、学内HPに「研究費使用ハンドブック」を掲載しています。「毒物及び劇物取締法」及び「国立大学法人香川大学毒物及び劇物管理規程」に基づき、施錠できる専用保管庫で保管し、使用記録簿の作成・管理・適正な処理を行っています。

また、廃液、空き容器などの処分については、「国立大学法人香川大学特殊排水処理規程」及び「香川大学医学部廃棄物処理規程」により適正に行っています。

毒劇物の管理に関し、教職員、学生などに対して必要な教育訓練を行い、管理状況を定期的に点検、監査しています。

●放射性物質の管理

放射性物質については、「放射性同位元素等の規制に関する法律」、「香川大学放射線障害の防止に関する管理規則」、「香川大学研究基盤センター放射性同位元素実験施設(医学部地区)放射線障害予防規程」、「香川大学研究基盤センター放射性同位元素実験施設(農学部地区)放射線障害予防規程」及び「香川大学医学部附属病院放射線障害予防規程」に基づき、適正な管理を行っています。また、放射性同位元素実験施設からの排水については排水の都度、排水中の放射能濃度が法令で定められている基準以下であるか監視測定を行っています。

●遺伝子組換え実験の管理

遺伝子組換え実験については、「遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律」、「香川大学遺伝子組換え実験安全管理規則」及び「香川大学遺伝子組換え生物等に該当しないゲノム編集生物の使用等に関する取扱要項」に基づき、実験計画を審査し、適正な管理を行っています。



大気汚染物質に係る管理状況

香川大学では、三木町医学部キャンパスのボイラー、冷温水発生機、自家発電機から発生する大気汚染物質である硫黄酸化物(SOx)と窒素酸化物(NOx)の削減に取り組んでいます。

SOxの低減策としては、低硫黄重油の利用や重油を使用している空調設備から電気式の空調設備への転換を進めています。また、NOxの低減策としては、専門業者によって中央機械室の空気比の調整を行っています。

大気汚染防止法施行規則で測定が定められているNOxの排出量について、2025年度(令和7年度)もすべて基準値を下回りました。引き続き、SOx、NOxの低減に努めていきます。



フロン類の適正管理

2020年(令和2年)4月改正「フロン類の使用の合理化及び管理の適正化に関する法律」が施行され、フロン類漏えい防止のための点検、漏えいが確認された場合の修理、漏えい量が一定以上の場合の報告義務などが定められています。

香川大学では、同法に基づいて保有する業務用空調機などの点検や漏えい量の把握、記録の作成などを行っています。2025年度(令和7年度)は、報告の必要がある1,000t-CO₂/年以上の漏えいはありませんでした。



グリーン購入・グリーン契約

香川大学では、毎年度「環境物品等の調達の推進を図るための方針」を策定・公表しています。この方針に基づき、紙類、文房具、オフィス家具など多数の物品、その他印刷、輸配送、清掃などを特定調達品目として目標を設定し、できる限り環境への負荷が少ない物品などの調達に努めています。物品などを納入する事業者、役務の提供事業者、公共工事の請負事業者などに対しても本調達方針を周知し、グリーン購入を推進するよう働きかけるとともに、物品の納入の際には簡易な包装にすることや環境に配慮した自動車を利用するなどを働きかけています。



環境に関する法規制の遵守

香川大学では、環境に関する法規制を遵守しています。2025年度(令和7年度)についても、環境関連法規制を遵守し、適切に管理しました。

【総合環境政策】

グリーン購入法 環境配慮促進法

【地球温暖化抑制・省エネルギー対策】

省エネ法 温対法 フロン排出抑制法 他

【廃棄物・リサイクル対策】

廃棄物処理法 各種リサイクル法 他

【自然環境・生物多様性】

遺伝子組換え規制法

【大気環境・自動車対策】

大気汚染防止法

【水・土壌・海洋環境の保全】

水質汚濁防止法 下水道法
瀬戸内海環境保全特別措置法 他

【保健・化学物質対策】

消防法 毒物及び劇物取締法 PRTR法 他

【条例】

香川県環境基本条例 香川県生活環境の保全に関する条例
高松市環境基本条例 他

大学概要

環境マネジメントの概要

SDGサステイナブルプラン

環境研究活動の紹介

環境教育による人材育成

地域への環境貢献

学生主体の活動

国際貢献活動

環境負荷の低減活動

環境報告ガイドライン対照表

編集後記

環境報告ガイドライン対照表

この報告書は、環境省が2018年6月に発行した「環境報告ガイドライン(2018年版)」に基づき作成しています。

項 目	記載ページ
環境報告の基礎情報	
1. 環境報告の基本的要件	目次
2. 主な実績評価指標の推移	22、23
環境報告の記載事項	
1. 経営責任者のコミットメント	1
2. ガバナンス	6
3. ステークホルダーエンゲージメントの状況	-
4. リスクマネジメント	30
5. ビジネスモデル	-
6. バリューチェーンマネジメント	31
7. 長期ビジョン	3
8. 戦略	3
9. 重要な環境課題の特定方法	22
10. 事業者の重要な環境課題	4-5
主な環境課題とその実績評価指標	
1. 気候変動	4-5、22-23
2. 水資源	4-5、26-27
3. 生物多様性	8、15、18
4. 資源循環	27
5. 化学物質	4-5、30
6. 汚染予防	29、31



香川大学キャラクター

細い線で「K」をモチーフにした動物(人)を描いています。「夢・個性」の発見に向けて、人一倍の「嗅覚(アンテナ)」を磨き生かし、知識、探求、思考、発想、実行を重ねながら、筋肉を身につけて魅力的な人となり社会に巣立つことをイメージしています。



編集後記

「香川大学環境報告書2026」では、本学の「環境配慮の方針」に基づく環境目標の達成に向け、「香川大学SDGsアクションプラン」に基づく推進プロジェクトをはじめとする2025年度に実施した様々な取組及び環境負荷の低減活動を紹介しています。また、これらの取組で得た成果や知見は地域の皆様へ積極的に還元しています。

本学では省エネルギー対策を推進するため、2024年度から2028年度の5年間で、2022年度を基準としエネルギー使用量、温室効果ガス排出量を原単位で5%削減することを努力目標に掲げ、全学を上げての省エネ活動や建物の省エネ改修など様々な環境負荷低減活動に取り組んだ結果、2025年度時点でエネルギー使用量は基準年度比2.6%減、温室効果ガス排出量は同12.3%減となり、温室効果ガス排出量は努力目標達成するとともに、エネルギー使用量についても目標達成に着実に進捗しています。今後も、目標達成及びその維持に向けて、継続的に環境負荷低減活動に取り組んでまいります。

結びに、本報告書の作成にご尽力いただきました学生・教職員の方々に厚く御礼申し上げます。

香川大学の環境に関する取り組みを継続・改善・発展させるために、学内外の皆様のより一層のご理解とご協力をお願い申し上げます。

2026年(令和8年)9月

理事・副学長(財務・施設・産官学連携担当)

国分 伸二



皆さまからのご意見・ご感想をもとに、今後の環境への取り組みや、環境報告書作成に活かしていきたいと考えております。お手数ですが、以下のアンケートにご回答いただければ幸いです。



<https://www.kagawa-u.ac.jp/kankyokanri/cgi-bin/kankyo00hon.cgi>

環境報告書に関するお問い合わせ

香川大学 施設環境部

〒760-8521 香川県高松市幸町1番1号
TEL : 087-832-1139 FAX : 087-832-1136
E-mail : sisetukikaku-h@kagawa-u.ac.jp

施設環境部長 高見 泰弘

施設企画課

課長

課長補佐

課長補佐

課長補佐

高田 修一郎

山本 大輔

渡邊 宏樹

岩山 勝幸

山波 倫久

山口 真奈

吉田 里佳



大学概要

環境マネジメントの概要

SDGsアクションプラン

環境研究活動の紹介

環境教育による人材育成

地域への環境貢献

学生主体の活動

国際貢献活動

環境負荷の低減活動

環境報告ガイドライン対照表

編集後記

Think Globally Act Locally



この印刷製品は環境対策を推進している工場で製造されています。



t 1 6 3

このパンフレットは環境負荷低減に取り組む「環境推進工場」で生産し、有害な物質がほとんど出ない「植物油インキ」を使用しています。さらに、古紙利用を推進する「グリーンマーク」の基準に適合しており、製品の表面上に細菌の増殖を抑制する塗工を施した「SIAA(抗菌・抗ウイルス)マーク」にも準拠しています。